

第二章

問題解決への道：その調査

この章ではできる限り多くの Voynich から現在まで様々な研究者によって行われてきた推量、推理、調査、研究を扱いたいと思う。私はこの手稿の重要なトピックに関連することを選んで整理した。(それらの出所、年代、言語、著者等に関することである。)それらは好奇心をあり、その巧妙さは我々全ての研究者を悩ます。私は現在進行中の、もしくは近年行われた部分的な研究の知識に対して問題を提示できる。多くは研究を一人で行い、彼らの考えや結果は彼らの親しい同僚・知人にしか伝えられてはいない。一人の研究者からの解読成功の知らせが世界に伝わる可能性は常にある。私はこの要約が不完全ながらも、今まで限られた場所でしか手に入れられなかった手稿の情報を集め、提供できるようになることを期待している。

2.1 手稿の歴史に関する推量

Voynich は手稿を発見したすぐ後、その歴史について十分かつ完全な調査に着手した。彼は興味深いデータを見つけ、そしてすでに知られていることの間にある空白の時間を埋める一連の出来事を明らかにすることに成功した。彼は手稿の起源をフランシスコ会の学者であり哲学者であった Roger Bacon(1214?-1292?)と突き止めた。彼 [Bacon]は近年そのオカルトパワーで有名である。Roger Bacon については後でさらに詳しく語る。(セクション 2.2.2, 5.1, 第七章を見よ。) Voynich が言うには彼は消去法と彼が行った仮定により、Marci の手紙の中で述べられているあるルドルフ朝の人間が似たように考えているのを知る以前から、Bacon が最も可能性がある著者と目星をつけていたとのことだ。この手稿を発見した建物で Voynich が調査している間に述べた推理は全文を引用するだけの価値がある。

"Even a necessarily brief examination of the vellum upon which it was written, the calligraphy, the drawings and pigments suggested to me as the date of its origin the latter part of the thirteenth century. The drawings indicated it to be an encyclopedic work on natural philosophy. I hastily considered the question of possible authorship of the work and the names of only two thirteenth century scholars who could have written on such a variety of subjects occurred to me: first, Albertus Magnus, whom I at once eliminated from consideration because his ecclesiastical and political position was such that it could not have been necessary for him to conceal any of his writings in cipher, and secondly, the Franciscan Friar, Roger Bacon, an infinitely greater scholar, who had been persecuted on account of his writings and whose scientific discoveries had been misrepresented as black magic. Moreover, for many years he had been forbidden by his order to write, and he himself referred in his works to the necessity of hiding his great secrets in cipher." [1921, pp, 415-416.]

Voynich は続けて Marci の手紙の発見について次のように述べている。

"It was not until some time after the manuscript came into my hands that I read the document bearing the date 1665 (or 1666), which was attached to the front cover. Because of its late date I had regarded it as of no consequence, and therefore neglected it during the first examination of the manuscript." [p. 416.]

彼は確かに手稿を Bacon と劇的な確証で関連づけることで満足したに違いない。

Voynich は次に彼が捨て去ったものの中から、できる限り多くの悩める追加情報に注目をした。彼は手紙の中で述べられている人々に関する多くの興味深い詳細や、他にも手稿に関係していそうな多くのルドルフに親しい人物、ルドルフ朝の人間を明らかにした。ルドルフについて言えば、彼の周りでは科学・疑似科学の気運が高まっていた。ルドルフ統治下のプラハは学問にとって重要な場所であり、多数の学者、スパイ、詐欺師、そして他の華麗な人々が集まってきた。これに関する著作では Bolton (1904)がいささか時代遅れではあり、現在の研究を考えれば公平さに欠けるものの楽しめるものとなっている。Evans (1973)はルドルフや彼の宮廷の緻密で興味深い文化について新しい情報を提供している。Evans はヴォイニッチ手稿に関して簡単にではあるが興味深い言及をするものの、その起源に関するものではない。

ここに挙げるのは、簡単ではあるが、Voynich が知られている歴史との溝を埋め、そして完全な状況を調査するための方針となるように出した仮説のあらましを私が年代順に並べたものである。(下の概略の全ての情報は Voynich 1921 からである。)

13 世紀中後期。この手稿は科学か魔術の秘密の発見を記録するために Roger Bacon によって書かれた。

1538 年? 手稿は宗教改革の時代、修道院解散までイギリスのある修道院図書館に置かれた。この破壊が始まったのが 1538 年である。

1547 年? 多くの Bacon 写本がエリザベス朝の数学者であり占星術師である John Dee 博士(彼については第八章以降に述べる。)によって集められた。(彼の収集は 1200 冊にもものぼったという人もいる。) Voynich によると彼はこれらを Northumberland 公 John Dudley を通して得た。宗教改革の際、彼は修道院を強欲に略奪し莫大な富を得た。Dee は手元にある間これを解読しようと試み、それは John Dee の息子 Arthur Dee を引用する手紙の中で、彼の父が「全て象形文字で書かれた」書物に多くの時間を費やしたと述べられ証明されている。(これについてもセクション 8.9 以下を見よ。)

1584 年~ 1588 年 John Dee は解読の試みに失敗し、彼の訪問地の一つ、プラハのルドルフ宮廷を訪れ手稿を持ち込んだ。そして皇帝ルドルフはおそらく手稿の代金として Dee 本人、もしくは彼の代理人に 600 ダカットを支払った。Dee もおそらくルドルフやその宮廷人たちに Roger Bacon 著作であることを信じさせた。Dee は生涯のかなりを Bacon 研究に費やし、Bacon の著作を広く宣伝し、この教会に非難され同時代人には軽視されてきた 13 世紀修道士の名声を刷新した。Dee はまた自分を Bacon の末裔であると主張した。(Dee によると Roger Bacon の本名は"David Dee"である。)

1608 年 ルドルフは側近の学者・研究者に手稿の解読を様々に試みさせた。この努

力の中、彼は研究目的でこれを Jacobus de Tepenez に託したのかもしれない。彼 [Tepenez] の名は手稿中に残っている。彼は 1611 年にルドルフが退位した際、そして続く皇帝の大きな博物館とコレクションが略奪・解体された際にもこれを持っていた。Tepenez が貴族に列せられたのが 1608 年のことであるから、それ以前に手稿に書かれているような名前を書いたはずはない。

1622 年 de Tepenez が死去したのが 1622 年であり、この後次の所有者 Marci が現れるまでの歴史については何も分かっていない。

1644 年？ Marci の手紙によると、この手稿はある期間 Marci と Kircher 共通の友人が所持していた。実際この期間様々な人物の手を渡ってきたのかもしれない。そして Marci の手に渡ったのは 1644 年より前のことだろう。なぜなら Marci はその年に死んだ Raphael 博士とそれについて議論をしているからだ。Voynich は Marci と Kircher 共通の親しい友人であり 1622 年から 1644 年まで手稿を所持していた人物は「ボヘミア州の文書館を調べれば発見できるだろう」と示唆した。(p. 419)

1665/6 年 1644 年から 1665 年（または 1666 年）の間は Marcus Marci が手稿を所有しており、その後 Athanasius Kircher の手に渡ったことは確かである。Marci と Kircher がそれを所有している間、何が行われたかは分かっていない。

1912 年 Voynich は「私の印象では Kircher は手稿を彼のパトロンや友人がいたパルマ宮廷の誰かに預けて、そしてファルネーゼ一族の手に渡し、私の見つけたコレクションの中へ他のマニユスクリプトとともに移されたのではないか。」と語った。(p. 430)

後の研究者は Voynich が調べた年表はとてもよくできていたので、ほんの少しの詳細を加えただけである。Brumbaugh (1975, p. 347) は Kircher が手稿を自分で直接モンドラゴネ寺院へ預けたことを示唆した。John Manly (1921b, p. 188) によると「Marci が手稿を 1640 年に所有していなかったことは明らかであり、彼はそのとき Kircher と共にローマにいた。」とのことだ。だからそのときに Kircher に渡したと考えるのが自然だ。彼は Marci についても『Idearum Operaticium Idea』の序文で彼の義理の母のローラという人について、ルドルフ皇帝博物館の責任者になった Dionisius Misserone の娘だと書かれてあると報告した。Manly が暗示するのは Marci に手稿を譲った未判明の人物がこの Misserone に違いないということだ。最後に Manly はルドルフが払った 600 ダカットについて 1921 年現在で \$14,000 に相当するとの興味深い情報を与えている。そして de Tepenez に関しては、この科学者は 1618 年に起こった動乱で国を離れることを余儀なくされ、その際この手稿を手放し、どうやらそれがプラハに残ったのだろうと記述している。

著名な歴史家であり、Bacon の研究者でもある Robert Steele は多くの Roger Bacon の著作を編集した。(Bacon 1909-1940) 彼は Voynich が手稿を John Dee に関連させたことに同意し、「私たちの信じるところでは、Voynich の Dee が皇帝ルドルフにそれを 16 世紀の終わりに Roger Bacon 著作として売却したとの推測は正しいものであり、おそらくそれは「象形文字しか書かれていない書物」と Dee の息子が Thos. Browne 卿に語ったものだろう。」と言った。(Steele 1928b, p. 563.)

2.2 著者、そして目的

2.2.1 捏造、偽造、ナンセンス？

多くの研究者が時として陥る疑問に、このミステリアスな暗号に対する研究の無成果はそれが偽造されたものであり、この文章の繰り返しは意味がない、または規則性から十分解読・翻訳が可能ならばであると言うものである。Wilfrid Voynich は手稿を確かに 13 世紀の Roger Bacon による本物と考えていた。Albert H. Carter (一時 Army Security Agency の technical historian であった。)はこのエレガントな謎を解こうとしている研究者との間で「とてつもない時間と、上質な羊皮紙のとてつもない費用を考えると、それが捏造であるはずがない。」と意見を述べた。それは裕福で教育を受け、そして狂った人物の作品と考えられるが、しかし捏造ではない。(1946, p.1) 手稿を研究する人たちの中で最も誠実かつ綿密な研究を行う一人である John Tiltman はその初期の報告で、確かに本物であることを確信して「私はこの手稿が完全に無意味のもの、わけが分からない狂ったいたずら書き、または捏造とは思えない。全く入念であり、矛盾のかけらも見られない。もっとひどいのは金儲けのための偽造をたくらんだというもので、全くありえないと私は考える。」と表明した。(1951, p. 1)

最近の発表でも Tiltman はこれらの判断を繰り返して、手稿が単なる「意味のないいたずら書き」であるとの意見を否定している。彼は「偽造が行われたという考えはたくさんある。しかしもし Currier 大佐の考えが正しいものなら全くありえないことである。」と続ける。(Tiltman 1975; Currier 大佐の複数の「筆記者」の発見を参照している。これについてはセクション 6.8 で述べる。) 著名な中世・ルネサンスの研究者である Erwin Panofsky は彼の研究に重点を置いて、「私はヴォイニッチ手稿の制作された場所、年代、目的がどうであれ、文書は完全に本物であると確信する。」と繰り返し意見した。(1954, p.3) 最後に William Friedman (彼は著名な暗号学者であり、この手稿の研究者でもある。)の妻 Elizabeth Friedman (彼女自身も有名な暗号学者であり、手稿を研究している。)は「その均質で、真剣な学者が何かを伝えようとした創造的作品を見れば、全ての学者が全くの捏造や、精神異常者が書いた落書きではないと十分に判断できる。」との同じような意見を出した。(1962)

最近では少なくとも一人の研究者が、手稿が偽造されたものであるという反対の意見を出していて、手稿中には文章を長くするだけを目的に多数の「ダミー」の文章が含まれていると主張する。Robert Brumbaugh (1974, 1975, 1976)は 16 世紀の好機に乗じた者が、皇帝ルドルフをだましお金を得る目的で急ぎ計画的にそれを制作し、そして彼 [ルドルフ] は実際にお金を払いそれを手に入れたと主張した。この終わりには、最後のページにルドルフの学者たちが容易に解読できるようにたくさんの「鍵」を与えられ、十分な努力をすれば解読できるだろうと思わせることであった。Brumbaugh によると偽の「証拠」は最後のページにあり、興味深く神秘的、印象的な科学、オカルトパワーの持ち主である Roger Bacon が秘密の書物に関連づけられた。彼が科学・オカルトパワーの持ち主であるということとは John Dee によってルドルフの宮廷で熱っぽく語られ、関心は高まっていた。

これら全てに関わらず、Brumbaugh は手稿が完全な意味なしではないだろうと考えていた。「隠れた文章があって、遅かれ早かれ共同研究によりそれは読めるようになる。それが何であるかを予測することはできないが、ふつうの植物書から、Roger Bacon のエリクサーの処方までの何かであろう。」と言う。(1975, p.354) Theodore C. Petersen 神父は幅広い歴史と哲学の知識を持ち、長い間手稿研究に情熱を注いできた。彼は「ヴォイニッチの文章は現存する 246 ページ全てを通してその決まった法則を変えることがなく、これは著者には文字が理解できる意味を含んでいたことを示唆している。」と表明した。(1953, p.1)

部分的にでも手稿の解読を成功させたと主張した 3 人の主な人物 Newbold, Feely, Strong (Brumbaugh は除く) は手稿を本物の真剣な 13 世紀または 16 世紀の制作だと考えていた。私は手稿を William Friedman がある特定の著者によるものではないと思うけれど、彼はそれを意味あるものを含み解読、読解できる文書だと考えていた。

手稿の研究者の一部とそれに関心を示さない人々は、それに価値ある自然科学や人文科学があるはずがないとの意見を発展させた。Tiltman は Friedman への初期の報告で、「どんな場合であれ、手稿中に歴史的そして科学的重要なことが書かれているとは思えません。」と語っている。(1951, p.1) にも関わらず彼はこの問題に深く長き渡る興味を注ぎ、彼は手稿が完全に無意味な偽造されたものであるとは考えていなかった。Elizebeth Friedman は手稿に対する一部のアカデミックな学者たちの真剣味を欠いた態度が彼の夫の研究を失望させる原因であったと語った。「手稿に対し詳細な研究を行った Friedman のような、解読されれば何らかの科学・学問にとって重要なことが得られるとの考えにたいして、多くのまじめな学者たちからは嘲りの言葉があがった。委員の意見は、解読は学問にとって前進ではない。手稿にはたぶんつまらないことが書いてあるだけだろう。」(1962)

私はこれら「学者たち」がヴォイニッチ手稿の表面だけに注目し、それを排除した推論には公正さが欠落していたと言わざるを得ない。たとえもしそれがルドルフ II 世朝の偽造であったとしても、誰がそれを書き、ルドルフに関係する誰の手を通して渡り、当時ブラハで宗教的、政治的活動の集積を担ったのかを理解することは大きな興味である。思想の歴史では、作品に内在する重要性より、たくさんの出来事が起こった場所の方が重要である。もし手稿がたとえ錯乱、特異なものであろうと、初期の魔術、錬金術、もしくは中世の作品の寄せ集めであったとしても他の判読でき、一つの課題を扱う(たとえば占星術、錬金術、医学) マニュスクリプトと同じく西洋思想にとっては少なくとも興味は内在し、科学的に意味がある。有名な学者はこのタイプの「通常の記事」が書かれたマニュスクリプトを研究することは時間の無駄と考えず、それに多くの時間をかけるだろう。

ヴォイニッチ手稿は一冊の本に少なくとも 4 つの異なる中世学科を一つのシステムに統合する試みが見られることから普通ではない。もし解読されたなら理論やこれらの相互関係する学科の教義が少なくともある個人や学校で信仰、実践されたことを示すとても興味深いものとなるだろう。たとえもし(私にはありえそうもない可能性であるが)文章が全くの意味なしであっても、文章の解読は暗号や隠匿の方法の理解を可能にして、暗号の歴史にとってはとても興味深いものとなるだろうし、たぶんアルファベットや筆記体系の研究にもなるだろう。私は手稿が捏造、偽造であるとの発見を受け入れるかもしれないし、また大量のダミー、被覆テキストが短い秘密のメッセージを隠す目的で詰め込まれているとい

うことを受け入れるかもしれない。それでも手稿がつまらない、そして注意深い系統研究をするに値しないという誤解から解放された正しい判断を見たことがない。私たちはそれが読めた後、または少なくとももっと良く研究されて初めて、その作品の価値を評価することができる。

2.2.2 誰が何を目的にそれを書いたのか？

見てきたように Voynich は著者を初めから Roger Bacon (1214?-1292?)と確信していた。彼の推理は上(セクション 2.1)で見てきた通りなのでここで繰り返す必要はないと思う。最初にこの秘密の書を解読したと名乗り出た William R. Newbold は、教会には受け入れがたい新しい科学の研究を日記として Roger Bacon が書いたものだと言った。Newbold によると彼は彼の弟子 John や幾人かの弟子、友人のために鍵を口頭で与え、それらは後に失われた。Newbold の発見を記述した書の第一章には Roger Bacon の生涯、著作、思想の優れた概略が述べられ、彼がこの 13 世紀修道士や彼の著作を十分に研究していたことを示すものである。(1928, pp.1-28) J. Malcolm Bird (1921)は Newbold の解読を認め、Bacon 著作であることに賛成し、長々とそれを支持している。

少なくとも 2 つの客観的かつ入念な調査が行われ、その著者が Roger Bacon である決定的な証拠がないことで一致している。(Bacon の自筆や、彼の作品の後代の写しかどうか。) John M. Manly (有名な筆記の学者であり、後に Newbold の説に異議を唱えた。)は初期にこのようなコメントを出した。「手稿を Bacon 著作とするものや、13 世紀のものとするものは文書の証拠からは証明されず、しかしこの伝承に反する証拠もないが、手稿の外観はこれを証明している...。」(1921, p.189) Tiltman もこの見解に同意し、「今の段階では手稿が Roger Bacon によらない、もしくは彼の作品の写しではない確固たる証拠はない。」(1968, p. 13) たくさんの著名な Bacon 研究者からこれは熱狂的に歓迎され、受け入れられた。Newbold による Bacon が著者だという主張については(Carton 1929; Gilson 1928)を見よ。この疑問に関してさらなる議論は第七章以下を見よ。

Roger Bacon は著者ではない。それ以外の人たちは Bacon が手稿を書いたことも、その一部分の作者であることもはっきりと否定している。その否定には書物の早すぎる起源と、Bacon 著作の後のコピーであるとは考えにくいという反論を展開している。彼らは専門家の、手稿は 1500 年頃のものだという意見を引用して、それは Bacon によるものにしては、いやたとえそれが写されたものにしても遅すぎる年代である。(ほとんどの Bacon 作品は 14, 15 世紀に写しが作られた。)その他の Bacon 著作を否定するものとしては、一般的には特に Newbold の解読による Bacon 著作の主張を強く否定するものであり、顕微鏡、望遠鏡その両方の発見とも時代錯誤、不可能であり、Bacon の時代の評価基準にまったくそぐわないものである。Erwin Panafsky はきっぱりと「私の意見では Roger Bacon 理論は事実と全く矛盾しており、それらは Manly が納得いくよう否定した。」と言った。(すなわち Manly の論文は Newbold の理論を覆した。)(1954, p.2) 著名な科学史家である Charles Singer 博士は Tiltman に宛てた手紙の中(12 November, 1957)で「(再び Newbold の解読に言及して)私は顕微鏡の知識を示唆するものは全て無意味であるとの結論に達しました。」と書いた。最後に Lynn Thorndike は特徴を強調しながら、彼の意見を「ヴォイニッチ手

稿と Roger Bacon 著作を結びつける 15 の可能性内たったの 1 つも可能性はない。」と述べた。(1929, p.319)

Anthony Askham が作者。Leonell C. Strong 博士 (彼の手稿解読の主張はセクション 5.3 以降に述べる。) は著者を 16 世紀の医師で暦、占星、植物書を発行した Anthony Askham (or Ascham) であると主張した。(Tiltman はこれらの初期印刷本を探し出した。 Askham 1548a, 1548b, 1550, 1552, 1553 を見よ。) さらに Strong は f93 に Askham の名前を見つけたと主張した。この理論と Strong が提起した解読は研究者の内誰一人として受け入れなかった。

他にも作者に関して一般的なものは、Carter 博士による「写し作品」の証拠 (1946, p.1) の主張である。彼は星座表の中で牡羊座と牡牛座が 2 つずつ書かれていることについて言及している。(実際はこれらの図表は注意深く見れば全く異なったものであり、「写し」は単なる表面的だけのものである。) Singer 博士は Tiltman への手紙 (12 November, 1957) の中でその起源について、手稿はいずれにせよルドルフ朝と John Dee に関係しているとの意見を述べている。一方で彼はつながりについてはそれ以上明記せず、彼には以前述べてきた Brumbaugh のものと似たような考えがあったのかもしれない。Panofsky は次のような意見を述べている。「私の考えでは手稿は医師か偽医者が秘密の知識を彼の息子や後継者に伝えるために書かれた。」(1954, p.2)

2.3 出所、元になった言語

イギリス、中世ラテン語。見てきたように Voynich は手稿を 13 世紀後半 Roger Bacon の作品だと考えた。そして彼もまた元になった「平文」を Bacon の現存する作品と同じ中世ラテン語であると推定したと思う。Newbold も同じく手稿の起源を「専門家の判断」、羊皮紙、インク、絵の様式からイギリスとした。(1928, p.44) 彼から出された解読は中世ラテン語の形式であった。Feely (1943) が手稿から見つけた言語もラテン語であった。しかし彼の得た省略形式の文章は他の学者に受け入れられることはなかった。

イギリス、中世英語。Leonell Strong (1945) はセクション 5.3 でこれから見るように、中世英語のテキストとして解読を成功したと主張した。他の研究者は彼の解読理論と解読後の文章を正しいものとせず拒否した。

ヨーロッパのどこか、ラテン語。Elizabeth Friedman (1962) によると彼の夫 William Friedman は他の専門家たちと「その起源は間違いなくヨーロッパであり、イギリス、フランス、イタリア、現ドイツかもしれない。」との意見で一致していた。彼女はさらに「元になった言語は当時皆が習い科学に必要であったラテン語であろう。しかし中世英語、フランス語、イタリア語、ゲルマン語かもしれない。」と言った。これらの見解は我々を落胆させるほどの広い選択を我々に残し、「専門家たち」の狭い領域の調査では完全な証拠を得られないことを示している。

イタリア。H. P. Kraus (1962 年から 1969 年まで手稿の所有者) の文献目録制作顧問 Hellmut Lehmann-Haupt は 1963 年 11 月 1 日付けの John Tiltman へ宛てた手紙の中でイタリアが最も可能性の高い場所であろうと提案した。彼は「古文書学と歴史的なものから見て、ヨーロッパの中でイタリアが最もその起源としては可能性が高いだろう。ヴェニスや

その他北イタリアで作られたという証拠はない。可能性としてあるのは中央、南イタリアなど自由な土地で、これはアラブ世界に対して開かれていたことを示す。」と言った。彼が言うには、アラビア語が元の言語であったと考えられる。Robert Steele は最後のページのいくつかの文字は「おそらく北イタリアの文字」と言った。(1928b, p. 564) Brumbaugh は比較的後期のヨーロッパ起源であるという彼の説をいくつかの絵の詳細から証拠を説明し、その上で星座図様円形図の一つから、「メダルの中の射手座は 15 世紀フィレンツェの狩人の帽子を被っている。」と述べる。(しかしそれは月の名前の上に後から書かれた。)(1975, p. 349)

ドイツ、もしくは東ヨーロッパ。Charles Singer は Tiltman に宛てた 1957 年 11 月 12 日付の手紙の中で、彼の手稿に対する印象を「ドイツ起源」で「John Dee とその運動に関係がある」と表している。日付は分からないが、同時期に書かれたことは間違いのない G. M. J. Flemming 博士宛の手紙の中で彼は「私は手稿が書かれたのは 16 世紀、おそらく南ドイツで John Dee とプラハに関係していると判断しました。」と同様の見解を多少詳しく述べている。Singer はまた元になった言語はチェコ語、ポーランド語、または他の中央 - 東ヨーロッパ言語と推定されると提案した。幸運にも彼はこの十分厄介な手稿の研究者に向けて、ハンガリー語では「全くありえない」と述べた。

Singer (Flemming への手紙の中で) と Panofsky (1954, p. 2) は最後のページにある散らばった文章について、それらは高地ドイツ語として読めると述べている。この読みは実際には Kenyon 大学の Richard Salomon が個人的な手紙のやりとりの中で提案したものである。Salomon 博士は混ざった文章の一部分は「so nim geismi[I] cho.」と読むべきで、それは中世の処方箋を意味していて、「(これこれの状態の時は) 山羊の乳を飲み、そして...。」である。この「処方箋」は途中部分が抜けていて、Salomon はこの行の前にある行から続いていると考えた。そして彼は f66r にある病気または死んで仰向けに寝ている男が描かれ、その周りをいくつかのわけの分からない物体に囲まれている側に書かれている短いドイツ語の単語の意味を説明した。彼は文章を「der mussteil」と読み、夫の死に際して未亡人が持つ家庭内の物品を分与することを言っているとした。

2.4 制作年代

13, 14 世紀。すでに述べてきたように Voynich は手稿を 13 世紀後半のものだと考えた。(1921, p. 415) Newbold は「専門家の意見」として羊皮紙、インク、絵の様式研究から手稿は 13 世紀のものであるとした。(1928, p. 44) Petersen は「Tiltman と意見が合ったのは、植物と占星表を並置していることから、手稿がかなり早い時期に書かれたことを示している。13 世紀 St. Hildegard of Bingen のマニュスクリプトでは天体と神の力が植物と動物に命を与えている絵が描かれている。14 世紀のパチカン手稿 1906 にはいくらか似た天体の絵が載っている。」(1953, p. 2) Steele は彼の専門的知識と個人的に中世写本に詳しいことから、(そして特に Roger Bacon の作品にも通じている。) 次のような興味深いコメントをしている。「通常のマニュスクリプトの年代決定法が使えない。なぜなら書かれた場所が分かっていないし、13 世紀のものにしては羊皮紙は劣化している。しかしインクの状態

は良いので不可能ではない。存在する絵は年代決定のためには全く役に立たず、むしろ困難を増しているだけだ。奇妙なことは、これを書いた人物は中世もしくはルネサンスの影響を全く受けていない。」(1928b, p. 563)

15 世紀。著名なアメリカの植物学者 Hugh O'Neill は新世界種の植物の絵を特定したと発表した。「その驚くべき同定は f93 にあり、はっきりと良く知られたヒマワリ(Helianthus Annuus L.)であり、この私の同定に 6 人の植物学者が同意してくれた。これはすぐに最初にこの種子がヨーロッパに持ち込まれた 1493 年(コロンブスが 2 度目の航海から戻った。)を思い出させる。そして f101v の絵はどのヨーロッパ原産の果実とも似ていないが、しかしまさにトウガラシであり、アメリカ原産の属で、上の年代の後ヨーロッパに知られるようになった。よってこの手稿は 1493 年以降に書かれたと考えられる。」(1944, p. 126) しかし他の研究者たちは O'Neill のヒマワリ、トウガラシ植物の同定を受け入れず、新世界原産の植物など一つも描かれてはいないことを強調した。(H. P. Kraus の文献目録制作顧問の) Helmut Lehmann-Haupt は Tiltman へ宛てた 1963 年 11 月 1 日付けの手紙の中で、「この暗号文書の書かれた年代はほぼ 1400 年頃、もしくはもう少し後であろうとの意見が最も受け入れられている。」と述べている。

16 世紀。Panofsky はこのミステリアスな暗号に関して後期の年代を提案し、「もし(O'Neill による)ヒマワリの同定がなかったなら、もう少し前の 1470 年頃と考へただろうはずだ。しかし絵のスタイルはかなり雑で、もう少し後 16 世紀に入って一桁(1500 年の一桁)である。この可能性は排除できないだろう。明らかにイタリアルネサンスの影響が見られないから、1510-1520 年までは下らない。上の年代は文字の特徴、絵のスタイル、そしてたとえば f72r に書かれた服装の証拠による。(おそらく双子座が着ている服を指していると思う。)」(1954, p. 1) Elizebeth Friedman は当時の専門家の意見の同意を次のように述べている。「古文書の専門家たちはその絵、筆記、インク、羊皮紙等の状態から、間違いなく 13 世紀後半よりもさらに後の制作年代で一致している。たとえばその時代はやせた女性が特徴であり、太った女性が特徴とされるのはそれよりも後になる。ある専門家たちはおそらくその年代は 1500 ± 20 年と考えている。」(1962)

A. H. Carter は Miss Nill (Voynich 夫人の友人であり、彼女は彼が手稿を調査したとき(1946)一緒にいた。)の同じような判断を紹介している。「絵の様式、特に女性を線で書くときの方法は完全に 13, 14 世紀よりずっと後のものだ。「ゴシック様式」もやせた姿も女性の絵に見られない。彼女らはふっくらとし、曲線的であり、その様式は後の時代の写実主義の影響を示唆するものである。そして絵の色使いもおそらく 13 世紀より後の年代を支持するものだ。」(1946, p. 2)

これら 16 世紀に作られたと考える人たちの中で、Charles Singer 博士は John Tiltman への手紙(1957 年 11 月 12 日)の中で「私の意見では、手稿の制作年代はおそらく 1520 年かもう少し後であろう...。」私たちはすでに John Dee とプラハが手稿に繋がりがあることを見てきた。Leonell Strong は興味深い発言をしている。「ある特定の記号の形式と使用(イタリアの d, di, el の鏡文字)は、その作者がレオナルド・ダ・ヴィンチの『Anatomy』(1510 年頃作成)を良く知っていたのではないか。」(1945, p. 608) 手稿の著者を Anthony Askham と考えた Strong による特定でも手稿は 16 世紀のものである。なぜなら Askham の著書は 1525 年から出版されたから。

Robert Brumbaugh はおそらく最も詳細かつ明確に 16 世紀作品である証拠を提示している。「私にはこれが初めから 13 世紀のものでないことは明らかであった。そしてルドルフ II 世と彼の研究者がそれを Roger Bacon 自筆の著書であるのかを本当に認めていたのかを疑っている。その詳細からは 1300 年より 1500 年に近いことがうかがえる。円の中の射手はフィレンツェの狩人の帽子を被っている。(しかしそれらは月の名前の上に加えられたものである。) f85r に置かれた時計は短針は時間を長針は分を表していて、この形は 15 世紀まで見られないものだ。つまり要約してみると、この手稿は 1500 年頃の編集作品である。」(1975, p. 349) (Brumbaugh の主張を支えるために彼が使ったものは、数字記号を使って解読する彼独自の方法に基づいている。私は客観的なコメントを除き、それらを省略する。「時計」のさらなる議論についてはセクション 3.3.6 を見よ。)

最後に Jeffrey Krischer はその研究の中で、Harvard University でマニュスクリプトの年代・出所に関わる研究者数人からの意見を得た。(セクション 6.7 を見よ。)彼はそれを以下のように報告する。

"Professor Giles Constable (professor of medieval history, Harvard University), in looking over photostats of the manuscript, dated the manuscript as sixteenth century and suggested that the script might be a form of private language motivated by the desire to keep such a powerful document from the general public. Science in this period represented power and if one assumes the manuscript is indeed describing plants and biological and astrological phenomena, then this line of reasoning is quite acceptable. The date of the manuscript was again placed in the sixteenth century by Mr. Rodney Dennis (curator of the manuscripts in Houghton Library of the Harvard College Library). Mr. Dennis identified the script to be in the style of the sixteenth century humanist script. Another dating of the manuscript was due to Dr. Franklin Ludden. Dr. Ludden determined the date as being in the period 1475 to 1550. His method of dating is based upon analyzing the style of the drawings; the features of the nude figures; the stylization of the botanical drawings." [Krischer 1969, pp. 51-52.]

研究者や専門家たちの意見を考慮して、私は意見をまとめるため大ざっぱに「点数表」を作ってみた。それはとても大ざっぱなものであるが、この手稿を研究し、蓄積されてきた様々な判断を読者が整理するのに役立つであろう。結果は下にあるが、私は独断で「専門家の判断」や「多数の同意」があったものについては 2 点、単に一人の研究者によって述べられた詳細に踏み込んでない意見については 1 点を与えた。

年代	得点
1250-1399	5
1400-1550	12

これらの専門家の意見を要約すると、私は手稿が後期に制作された可能性が高いと思う。